京都府立医科大学附属図書館

マキコ・平田

I. 図書館の歴史

京都府立医科大学は、1872（明治5）年に栗田口村の青蓮院内に療院が入居するがそのままであり、それ以上130年の歴史を持っています。1880（明治13）年には、京都療院・医学校として、京都市の東方、鴨川と京都御所に東西を挟まれた山吹神明の地に竣工され、現在にいっています。栗田口療院開設時に招聘したヨンケル（Junker von Langegg）や、続くマンスフェルト（C.G.van Mansvelt）、ショイペ（Heinrich Botho Scheube）ら招聘外国人医師に関しては、附属図書館内の展示コーナーに関連資料を展示しています。当館へおいでの際には是非ご覧ください。

附属図書館は、1890（明治23）年に京都療院内に学術団体「京都医学会」が設置した書籍室にはじまります。その後1899（明治32）年に京都府医学校校友会経営の京都医学図書館へと発展し、1926（大正15）年大学に移管され、京都府立医科大学中央図書館となりました。1929（昭和4）年に竣工した図書館棟は瀬戸なレンガ造りの建物で、大学のシンボルとなっていましたが、本学創立120周年にあたる1992（平成4）年、附属図書館・合同講義棟として学館側の現在の地に建築された新館にその機能を移しました。

当館では外国人医師の講義講義などを、本学の長い歴史を物語る医療機関の歴史に見られる神戸谷文書の「精神科病読書」（明治9年）、日本最初の医学雑誌「京都療院雑誌」第1号（明治5年）などがあります。

II. 図書館の現状

京都市の西方に本学の教養教育をつかさどる花園学舎にも附属図書館の分室を設置し、職員1名が常駐しています。このため一般教養に資する資料はほとんど花園学舎内におかれ、附属図書館本館は医学・看護学系の専門書を中心とした蔵書構成となっています。

当館に来られる他学部図書館の皆様によくお世話になっていますが、池田環境のよさと、館内がさわやかなということです。現在の建物は新築後約10年とまだ新しく、書架にも若干ゆとりがあるので広い印象があるようです。

建物の面積は、大講義室など図書館以外の管理部門も含め、延べ5020m²です。大講義室は「図書館ホール」と親し、学会などに利用されており、2003（平成15年）夏にはここメイン会場に「第20回記念医学情報サービス研究会京都大会」を開催し、ご好評いただきました。図書館部分は地下1階（2層）地上2階の構造で、所蔵資料は貴重書を内蔵し、すべて開架式としています。

蔵書数は257千冊、雑誌は6,535タイトルを所蔵しています。雑誌についてはコンローザム等を利用して、利用者からの要望が多い、電子ジャーナルのタイトル数拡大に努めています。また冊子体についても、予算が厳しい中、少しでも補充し、利用者に届けたいとJMLA
の重複誌誌交換事業に毎年積極的に取り組んでいます。加盟館の皆様にはこのような場をお借りして御礼申し上げます。

館内の設備は、閲覧席が215席、データベース利用のための情報検索室、学生グループ学習によく利用されるセミナー室、研究者用の個人閲覧室の他、視聴覚室、展示コーナーなどがあります。

III. 図書館のこれから

業務の電算化として、1983（昭和58）年にポータブル端末を使ったオンライン情報検索、1984（昭和59）年には閲覧室配置の3,000冊分のデータをオフィスコンピュータに入力して貸出返却を開始しました。

新館開館時の1992（平成4）年には図書館業務のトータルシステムを導入し、閲覧入力により全資料のOPAC検索を可能としました。その後1997（平成9）年の更新を経て2004年1月から新しい図書館システムを導入することが決まっています。（この記事が皆様の目に触れることには新システムが稼働していることです。）新システムの導入により、オーバック上での資料の予約など、インターネットを活用した利用者サービスを拡充させることができるなど、職員一員期待しているところです。

また、各関連病院に勤務する医療従事者へのサポートシステムを充実させるため、1999（平成11）年に「医学情報ネットワークサービス事業」をちからあげました。司書の配置されていない病院に勤務する医療従事者も快適に研究・診療を行えるよう、文献入手やリファレンスなどの手伝いを行っています。

2003（平成15）年11月には、府内の情報通信環境の向上を図るため、京都府が整備していた高速大容量の光ファイバーネットワーク「京都デジタル医療ネットワーク」が完成し、図書館のネットワーク環境も一段と整備されました。本学ではネットワークを活かして遠隔医療や診療支援を行う計画を持っています。図書館もこの環境を生かし、府立大学附属図書館として、京都府全域の医療を支援し、貢献できるような情報の発信を目指して取り組んでいきたいと考えています。